漢法苞徳塾資料	№. 002
区分	15 回夏期研修合宿
タイトル	**圧縮して要項のみを記述すれば**
著者	八木素萌
作成日	1997.08.23

◇我々のシステムを圧縮してみれば、次のようになります。

1）臨床カンファレンスのできる鍼灸治療と鍼灸師を追及している。

2）このテコとなるものがカルテである。とくに「診察チェック表」が重視される。これには、いくつかの試作も行って長期間の検討をした。脈診の結果を図示すべきであると考えるので、脈診を図示するために「脈診表」も作成している。いまは、「問診表」の最終的な仕上げ作業の最中である。

3）以上のように表現された「診察所見」に基づいて「病解」を行なう。こうして「病を理解」する。その理解に基づいて「治則」＝如何なる方針で治療すべきか＝を選択する。この段階で「証」名を決めることにする。ただし、「病解と治則」こそが大切ですから、これが表示できていれば、必ずしも「証」名を付けなくとも良いことにしている。

4）「汎用太鍼」と「三稜鍼」を用具としている。ただ、「汎用太鍼」の巧みな運用の為には、「九鍼」を正しく運用できる必要があると考えているので、これの練習と、「毫鍼」の現代各種手技のマスターが求められている。これらこそ「汎用太鍼」の巧妙な運用を保証する。

5）体成分・治効を目指す部位〈目的部位＝深さ・臓腑・組織〉・変動の状態＝病態などの治療目的にそぐうような「手技運用」を重んじる。

6）病態の性質に対応して旺気する部位・臓腑・経絡経穴の問題を、診察と治療において見落とさない事を求めている。経絡・経穴に病の反応が表現されると言うのは、病因・病臓腑のみでは無い。
体質やライフスタイルなども表現されている。脈状や尺皮の表現の中には病態を五臓名で記述している場合があるので、この点を指摘して置かなければならない。

7）「配穴・取穴」にあっては「６８難・７４難・７５難」そして『難経』の「積聚論」が示唆している配穴論など、これらを運用原理とする。故に「邪」の五行的性質、運気、病の所在部位、内傷病の発現機構を重視するので「痰」「飲」「瘀」などの病理的産生物の所在および態様、などを診て、病に対処するのである。この際、「外感病」では「傷寒」と「温病」を区分して、基本的な「配経・配穴」原理を選択する。「内傷病」は「雑病」として扱う「配穴論・治療論」によった方式を運用する。